

人とのつながりや温かい関係性の構築をめざし それらの大切さに改めて気づく

高校卒業後、2年ほど就職し、専門学校で建築を学び直した井上愛理さん。その理由は建築の仕事に携わる父親と将来一緒に仕事をしたいと考えたからだと言う。専門的な知識やスキルの習得のために学びなおすことのできる「リカレント教育」を受けるため、大阪工業技術専門学校に入学した。「クラスメイトには前職が美容師や看護師、主婦など様々な経験や価値観を持った人がいました。彼らとのなげない会話や議論の中で、自分の価値観や視野が広がっていった」とのこと。そして、彼女が「建築の父」と呼ぶ、建築家・吉井歳晴氏に会い、さらにその魅力にはまっ

↑OCT講師

ていく。専門学校では住環境の設計を中心に学んだ。もう少し大きなスケールで建築について考えたくなり、神戸芸術工科大学に編入することにしたそうだ。「編入したばかりのころは、今まで学んでいたこととの間に様々なギャップがありました。その中で、自分らしい設計とは何かと考え続けました。今、卒業制作が終わって思い返してみると、二つの学校に通ったからこそ生活空間という小さなスケールと商店街というアーバンスケールを掛け合わせた提案ができたのではないかと思います。」

井上さんの卒業制作「つどイロの間」は、通りに対して「押し出し」と「引き込み」という建築的操作を行うことによって、新たな空間を生むだけでなく、コミュニケーションの手がかりとし、結果としてまちを活性化させることをめざしている。本当は、毎日敷地に行き、まちの空気を感じたかった。住んでいる人の話をもっと聞きたかった。それができない状況だった。

「私は人とのつながりや温かい関係性に魅力を感じていて、また、それが卒業研究で実現したいことのひとつでした。それなのに、コロナ禍での様々な制約によって現地に行けず、思ったように設計が捗らず、悶々しました。でも、ある時、できることをやるしかないと考え方を変えたんです。そこでもともと好きだった写真を駆使して店構えの写真を撮り、「構え方」について検証することにしました。そして、それをゼミで議論する。その繰り返しが論文や制作につながったと思います。」

この一年は「建築ってなんだろう？」と悩み、「今までの人生で、一番もがき苦しんだ」と言う。「死に物狂いで建築に向き合い続けることで、正解のない建築との距離が少しは近くなったと感じています。コロナ禍でリモートで接することが当たり前になって、人との関係がどこか希薄になる中、畑友洋先生をはじめ、ゼミの同期や後輩、友人など、本当にたくさんの人に助けられました。卒業制作を通して改めて人とのつながりを感じる事ができました。そして、やっぱり温かい関係性は良いな〜と。」

「これからも死に物狂いで建築と向き合っていく」と言う井上さん。とても頼もしい。人との関わりを大事にし、人に助けられてきた彼女はきっと、人を喜ばせる建築をつくることができるだろう。



2020年度卒業制作
学長賞

ERI
INOUE
井上愛理

井上 愛理(いのうえ・えり)
1995年 大阪府守口市生まれ
2014年 宣真高等学校卒業高等学校
2019年 大阪工業技術専門学校卒業
2019年 神戸芸術工科大学編入学
建築新人戦16選(2019)入賞

撮影:高橋 海 インタビュー・文:石坂 美樹